沖縄タイムス OKINAWA TIMES 特別号

島ぜんぶでおーきな祭

第7回沖縄国際映画祭

企画・制作　沖縄タイムス社広告局
〒900－8678 那覇市久茂地2丁目2番2号

無料（Take Free）

スターずらり コザ湧く

沖縄市で初カーペット

383人笑顔でウオーク

「沖縄市はエイサーやロックが盛んな芸能の街。異国情緒もたっぷりで、国際映画祭にぴったり」―。会場の熱気に包まれて、ガレッジセールのゴリは声を弾ませる。沖縄市で初開催となったレッドカーペットが28日午後、コザゲート通りであった。180メートルのレッドカーペットの両脇は、お目当ての俳優やお笑い芸人を一目見ようと開演前から観客で埋め尽くされた。俳優やお笑い芸人ら48組383人は観客に笑顔を振りまき、サインや写真撮影などに応じて交流を深めた。

ファンと握手を交わしながら歩く「Zアイランド」の哀川翔

「田沼旅館の奇跡」で主演した夏菜は春を感じさせる衣装で登場

間寛平やチュートリアルの徳井義実、ウーマンラッシュアワーの中川パラダイスらお笑い芸人が続々と登場。デニスは「スターになった気分」とおどける。武田梨奈や高月彩良ら女優には「きれいねぇ」と観客席から感嘆のため息も。鮮やかなピンクのワンピースで現れた夏菜は「緊張で足が震えるが、観客も天気もあたたかくて、本当に楽しい」と笑みがこぼれる。

詰めかけた観客、一人一人に丁寧に応じた哀川翔は「ゴールまでたどり着けない」、木村祐一も「コザはお客さんのひきが強い。7回の映画祭で一番記憶に残る会場」と驚いた。渡辺直美も右に左に動き回って観客と触れ合い、歓声が絶えることがなかった。

その他にも、沖縄ロックのシンボル的存在のひげのかっちゃん、若者に人気のロックバンド・2side 1BRAINやシベリアンスカンクが登場するなど、コザらしい一面もみせた。コザ応援団の屋嘉比あかり団長は、「こんなに人が集まり感無量。レッドカーペットをしたいと声をあげて良かった」と成功を喜んだ。

「島ぜんぶでおーきな祭」第7回沖縄国際映画祭」は29日で終了する。

「ナイトミュージアム」の吹き替えを担当した徳井義実と渡辺直美

「原宿デニール」からダブル主演の武田梨奈（右3人目）とBEE SHUFFLE

きょう閉幕

きょうは国際通りで

29日は12時から那覇でレッドカーペットが開催される。品川ヒロシ、哀川翔らコザレッドカーペットに登場したメンバーに加え、斎藤工、橋本愛、かりゆし58など多彩な面々が情緒あふれる国際通りに敷き詰められた赤い絨毯のうえを歩く。

昨年の国際通りレッドカーペットの模様

シーサーだより

▼28日のコザゲート通り。敷き詰められたレッドカーペット沿いには、開始の2時間以上も前から中高生を中心に鈴なりの人だかりができていた。▼「島ぜんぶでおーきな祭」を支えるのが、沖縄各地で結成されている応援団だ。当初は宜野湾市だけだったが、今年は23市町村までに増えた。▼コザでレッドカーペットが開催されるのは今年が初めて。きっかけはコザ応援団の屋嘉比ゆかり団長が、昨年のクロージングセレモニーで「来年はコザでレッドカーペットを実施します」とスピーチしたことだった。「昨年、那覇のレッドカーペットで街がとても賑わったと聞き、軽はずみで言ったのですが、市長や副市長、議員の方々の賛同も得られ、夢が叶いました」と屋嘉比団長は笑う。▼屋嘉比団長も第1回は子供を会場までクルマで送るだけのかかわりだった。それが6年後、運営する側に回り、地元にレッドカーペットの招致まで実現させた。地域に根差すことを目指している、この映画祭ならではのエピソードだろう。▼沖縄41市町村のすべてに応援団が結成され、毎年、持ち回りでレッドカーペットを開催する――それは「島ぜんぶ」で盛り上がるこのお祭りの一つの完成形かもしれない。（麻生香太郎）

コザゲート通りレッドカーペットを闊歩するコザ応援団の屋嘉比ゆかり団長と団員たち

短編映画「ルマ」ノエン監督語る

人間の孤独 描ききる

“地域発信型プロジェクト”で27日に上映された短編映画『ルマ』は、海外から見た沖縄の魅力を世界へ発信しようという意図で制作されたもの。インドネシアの俊英ヨセプ・アンギ・ノエン監督＝**写真**＝が、コミュニケーション・ツールの個人主義化によってもたらされた人間の孤独を、一人の女性を通して浮かび上がらせていく。

「単に風光明媚な沖縄ではなく、そこに生きる人間の息吹を描くことで、その土地の真の美しさを伝えることができると私は思います。今回は現代社会が抱える問題を、沖縄出身のエリカさんに象徴させてみました。景色と調和するほどに美しい彼女は、全身全霊で全てのシーンに向き合い、ただ座っているだけで孤独を体現できるほどの存在感を示してくれましたね」

ヒロインの故郷・南城市の風景が、日本とも沖縄ともつかない独特の映像センスで魅感的に切り取られている。

「撮影監督はインドネシアから招き、音楽も伝統音楽のカランチョンと、坂本龍一さんら日本のモダンピアノのスタイルを融合させてみました。今後も合作を含めたアジア各国の交流は大切だと思いますし、沖縄国際映画祭がその足掛かりになってくれると嬉しいです」

「Zアイランド」上映

哀川、壮絶な闘い

芸能活動30周年を迎える哀川翔の主演最新作「Zアイランド」の上映が28日、北谷町のミハマ7プレックスであった＝**写真**。品川ヒロシ監督、共演の木村祐一、宮川大輔、川島邦裕（野性爆弾）、大悟（千鳥）と舞台あいさつにたった哀川は、「対決ものだが、泣ける場面もあり、節目にふさわしい映画」と胸を張った。

元ヤクザ組長の宗形と仲間が訪れた島は、Z（ゾンビ）が大量発生中。迫り来る不死身のゾンビに、組解散の因縁を作ったヤクザも加わり、壮絶な闘いの火ぶたが切って落とされる。

相手がゾンビの設定に、哀川は「闘う役を多く演じてきたが、まだ闘ってない相手」と即決でOKしたといい、品川も「好きなモノを全部詰めこんだ映画」とにんまり。一方、最初のZに感染する役の宮川は「監督が細くてプレッシャー。走り方もエリマキトカゲみたいだし」と役作りの苦労を話し、笑いを誘った。

おばぁタイムス

大城さとし

橋本愛・斉藤工が魅力語る

28日は「島ぜんぶでおーきな祭」の名にふさわしく、県内に広がる各会場での舞台挨拶に有名俳優たちが次々と登壇し、観客の歓声に応えた。

昼の桜坂劇場（那覇市）には橋本愛＝**写真右**＝が登場し、出演した「ワンダフルワールドエンド」松井大悟監督らと共に作品への思いを語った。

続いて18時30分、那覇市にあるシネマQには斉藤工＝**同左**＝が登場。観客から大きな声援が沸き起こる中、共演のしいなえいひと共に、自身が主演した映画「虎影」の魅力を語り合った。

余興映像♡競う

にーびち映画祭

28日、結婚式の余興映像コンテスト「第５回にーびち映画祭 in よみたん」がよしもと沖縄花月で開催され＝**写真**、数あるエントリー作品の中から厳選された10作品が上映された。上映作品は、アイデア満点のハイレベルな力作ぞろいで、観客も熱心に見入っていた。本選は、５月31日に沖縄残波岬ロイヤルホテルで開催され、グランプリおよび各賞が発表される。

コラム

父の沖縄 ㊦

又吉直樹（ピース）

沖縄には忘れられない思い出がたくさんある。沖縄に住む祖母の家に、父と二人きりで帰省した時、僕はまだ六歳の子供だった。

ある夜、祖母の家に親戚や近所の人達が集まり大宴会が開かれた。父は、たえず話題の中心にいて、みんなから慕われているようだった。

一方、僕はいつもの人見知りを発揮し、部屋の隅に一人で座り、大人達の顔が少しずつ赤らんで行くのを、心細く眺めていた。

親戚の一人が三線を弾くと、それに合わせてみんなが手拍子を鳴らした。次第に場が盛り上がる。父が立ち上がり、カチャーシーを踊りはじめると、大爆笑が起こった。心から父を凄いと思った。

その時、誰かが僕に向かって、「おい、直樹も踊れ！」と言った。その声に反応して、みんなが僕の方を見た。僕は人前で踊れるような明るい少年では無かった。

しかし、ここで僕が踊らなければ父が折角盛り上げた場が白けてしまう。父の行為を無駄にしたくなかった。僕は覚悟を決めて、全力でカチャーシーを踊った。僕は、父よりも遥かに大きな笑いに包まれた。華奢で青白い顔をした都会の子供が下手な踊りを全力でやったのが滑稽だったのだろう。僕は生まれてはじめて、人を笑わせることに成功した喜びを噛みしめながら、台所で麦茶を飲んでいると、父が近づいてきた。てっきり褒めて貰えるものだと思い、笑顔を浮かべる僕に対して、父は「あんま調子乗んなよ！」と言った。子供相手に本気で嫉妬したのだろう。人を笑わす快感と同時に、表現することの恐ろしさも知ってしまった。芸人でありながら、臆病な僕の人格は、沖縄の地で形成されたのである。

イオンモール沖縄ライカム
4月25日(土)グランドオープン！

北中城にオープンする県内最大規模の「イオンモール沖縄ライカム」。
コンセプトは「ここだからこその沖縄体験で迎える“Okinawa Resort Mall”」
地元で暮らす人も、旅する人も、海外から訪れた人も。
ひとりひとりが時を忘れ、日常を忘れ、今を楽しむ。
そんな、暮らしと旅の新しいワクワクを、皆さまとともにつくっていきたい。
さぁ、ライカムから。この島を、もっともっと、おもしろく。

AEON MALL
イオンモール沖縄ライカム
http://okinawarycom-aeonmall.com